



同志社人物誌 (49)

牧野 虎次

室田 保夫

はじめに

同志社の生んだ偉大な社会事業家・留岡幸助は「一路到白頭」を座右銘として、終生を専心一事業に挺身したけれども、人の一生は各々の持つ資質や境遇を契機にして、様々なヴァリエーションを招来するものである。

天の父よ、昔荒野で飢えた予言者を養い給いし如く、父なき貧しい弱き児を孚み育て、今日に到らせ給う御恵を感謝し奉る。曾ては悲しと思つた一つの出来ごとは、いづれも天の父の愛の鞭でありました。教きれない御恵みの数々の内でも賢き母、良き妻子、に加えて、世にも得がたき立派な師友を与えていたゞきました。おかげで何一つ取り所のない

罪深い僕が、入信以来七十一年間、怪我も病氣もせず、無病息災で、ここに米寿を迎えることが能ました。そのみでなく国の内外を問はず、数百に上る先輩、同志等が不肖の私を励まし祝つて被下しました。斯る御鴻恩に対し、愚かな私は何とおこたえ申してよいか、たゞ聖名をたゞえて栄光を天父に帰しまつるの外はありません。

世の凡ての罪人を救はんとて、自ら十字架にかゝり給える主イエスの御名の為に、この感謝の祈を受けさせ給へ。アーメン。

これは、牧野虎次が米寿を迎え、その記念に上梓された『針の穴から』(昭和三十三年)という書物の冒頭「感謝のいのり」という文

であるが、この中には、牧野自身、越しかた八八年に亘る人生行路を一人のキリスト者として生きた想い出が集約されている。

一、生涯と足跡

牧野虎次は明治四年七月三日、滋賀県蒲生郡西大路村で、父・安良、母・寿子との四番目の子供(兄一人姉二人)として生を享けた。故郷の朝陽小学校(朝陽学人と称するものもこれに依る)を経、一八年、官立大阪大学分校に入るが中途退学し、二〇年、同志社英学校に入学する。二五年六月、同志社を卒業してからは、熊本東亜学館教師、同志社予備校寮長、北海道集治監監教諭師、土佐基督教伝道師、エール大学留学、「基督教世界」の編輯、京都四条教会教師、日本組合教会幹事、内務省囑託、満鉄社会課長、大阪府囑託、東京家庭学校長、同志社総長、戦後において、京都府教育委員長、ホノルル・マキキ聖城教会教師、シカゴ基督教教会教師等を歴任し、「これほど多彩な人生行路に成功した基督教徒は珍しい」(『同志社九十年小史』)と称される程、変化に富んだ人生を送り、昭和三九年二月一日、九二歳で他界する。この間、



後列右端が牧野虎次氏、エール協会のメンバー・同志社クラーク館にて

『基督教世界』等のキリスト教系の新聞、雑誌、或は『社会事業研究』『人道』等の社会事業関係の紙誌に数多くの論文を発表し、『旧約全書総論』（明治三八年）『新約全書総論』（明治四〇年）『基督の聖訓』（同年）『留岡幸助君古稀記念集』（昭和八年）等の編著書もある。

いま、ここでこのように多岐に亘る牧野の足跡を概観すると、凡そ、牧会事業、社会事業、教育事業に大別されよう。しかし、それらの事業は決して別個に存在したものでなく、「感謝のいのり」に窺えるように、奉教以来の

キリスト教を原基にして生まれたものにすぎないことを先ず注目しておかねばならない。

二、回心と同志社

生涯をキリスト者として生きた人にとって「回心」が、その人生に燦然たる輝きを放つように、牧野のキリスト教との出会いも、生涯を決定的ならしめるべく劇的なものであり、後世まで脳裏に鮮明に刻み込まれている。牧野が生まれて初めてキリスト教に邂逅したのは、同志社の入学式の時であり、柏木義圓の祈りの中の「天の父」という言葉、即ち「天父を呼ぶ哀情の叫聲」に胸打たれたからだとして、「自分はこの時初めて靈界の実在に触れ、自から『義しき者の祈りは力あるもの』なるを悟り得たのである。これは行く々々自分の生涯に一転向を与ふる動機となるに至った」と当時を述懐している。（復刊『人道』三三三号）そして、牧野は明治二〇年二月一八日、同志社教会で大塚素らと共に金森通倫より洗礼を受けることになる。

ところで、牧野の同志社での同窓には、西村清雄、山本徳尚、大塚素、上級に留岡幸助、吉田清太郎、下に水崎基一、山室軍平ら

がおり、新島や、ラーネッド、デビス等々の良き師、良き先輩、友人に恵まれた学窓生活であった。しかし、不幸にも尊崇する新島は、牧野の在学中、大学設立寄金募集奔走の途で夭折する。だが、新島の「活ける力ある基督教主義」（同志社大学設立の旨意）の理念は他の学窓と共に、若き牧野の中にも浸透していたと考えてよい。牧野は明治二二年四月、『同志社文学会雑誌』に「敢て問フ同窓ノ諸君」と題し、「我校特有ノ元氣」として「活ケル能力アル基督教ヲ實際ニ応用スル」ことであると説き次のように開陳している。

吾人が基督教ヲ奉ズル所以ハ決シテ哲理深遠ナルガ故ニアラズシテ是ニ由テ吾人ノ品格ヲ養ヒ吾人ノ生命ヲ得以テ真正ノ人間タラント欲スルニ外ナラザルナリ活ケル水活ケルパンヲ得ント欲スルニ外ナラザルナリ此ノ水ト此ノパントニ由テ生活スル者コソ真ニ我校特有ノ元氣ニ由テ養成セラレシ者ト謂ツベキナリ敢て問フ同窓ノ諸君ヨ卿等ハ是ノ元氣ヲ得タル我校生徒ト自称スルヲ得ルカ

ここには、「品格ヲ養ヒ」、「生命ヲ得」、「真正ノ人間」たるうとする若き学徒牧野の情熱的な求道の態度が察知できよう。そして、牧野は同志社卒業後、柏木の紹介で熊本東亜学館の教師を一年勤め、二六年九月より同志社予

備校寮長として再び母校に帰る。

三、監獄教誨―「北海道バンド」の一人として

同志社を辞し、牧野が就いた事業は北海道集治監、十勝分監での教誨事業であり、その就任期間も明治二八年二月から一月迄と極めて短期間ではあったが、その体験こそ、後の牧野の思想形成の上で重要な鍵を秘めているといわねばならない。

明治一四年、樺戸に集治監が設置されて以来、北海道には内地の多数の囚人が移送されたが、そこでは、北海道開拓と相俟って囚人達を極めて苛酷な外役労働に懲っていた。かかる中において、明治二年、原胤昭の赴任後、大井上輝前を中心にして、キリスト教教誨師達が囚人への伝道、教育、感化事業に尽力していた。牧野の先輩たる留岡も「暗きに光を照らす」という強い召命感をもち渡道していたし、他に同志社出身の阿部政恒、松尾音次郎、末吉保造、山本徳尚、水崎基一、中江汪らも該事業に加わっていた。同志社時代に「天父を信じ、隣人を愛し」「最小者の一人に奉仕」することを教わった牧野も敢然とその

中に入り、同労者となっていた。

牧野は当時の状況を「諸監獄集治監などを巡視して尠なからざる感想を抱き申候宗教教育家若しくは社会的問題を気に懸ける人々等是非一考を煩はすべき事と存じ候兎に角社会水平線以下に墮落しをる同胞等のごとに御座候間世人の注目を惹くこと少なく為めに度外視せられる事と存候……後略……」(『同志社文学』第八七号)と忌憚なき感想を

北辺の地より認めている。又、『獄事叢書』第二三号では「彼れ積衣を纏ひ鉄鎖に縛せられ身は圜圍の中に呻吟する惡漢無頼の徒と雖も同じく此れ『人の子』に非ずや若し此を処するに『人の子』の道を以てすれば彼等も亦『人の子』たる改悛をなすべきなり」と、世間より排斥せられた幽囚の徒に対し同じ「人の子」として向きあっていく姿勢を示し、そして「監獄事業」は「教育事業」であると主張している。勿論、かかる考え方は他のキリスト教教誨師と意見を同じくするところであるし、生江孝之が後に「北海道バンド」と称したように、牧野を含めた彼らの功績は、キリスト教史のみならず、行刑史上からも高く評価されねばならない。ところが軌道に乗り

つつあった牧野らの事業は、北海道集治監の官制改革に伴って生じた仏教系教誨師との教誨方法の齟齬を来たし、不幸にも明治二八年一月、頓挫することになる。「連袂辞職」で教誨事業を中途で放棄せざるを得なくなった牧野は、明治二九年一月、当時米國に遊学していた留岡に不良少年の感化事業の必要性とそれに尽瘁する覚悟をのべ、次のような書簡を認めている。

伝道者としてハ、所謂説法計りにてハ不十分なり。人々の How to live の問題に直接の影響なくんば到底膠柱守株の迂儒たるに過ぎずとハ、此れ小生が十ヶ月間監獄の中において人生の墮落史を研究したる末の発明に御座候。故に将来の伝道者ハ、少くとも身自ら一代の師表を以て任じ得らるゝ者に非んば、ダメなりと悟り申し候。かゝれば、モット活動多くして活気多き所謂活きた人間でなくては、迎も宗教家にハなられぬ事と、深く自ら警めをり候。同心協力一方に於ては精神界の革命軍を以て自上期し、一方に於てハブリッヅン・ウヲーク革命軍の急先鋒を以て自ら任じ、俗史軍にハ感化の何たるを知らしめ、教会の人々にハ活動の何たるを知らしめ、進んでは邦家人心の革新を期し、退ひては同志諸友の団結を図り、以て幾分なりとも我党の本色を天下に発表する事を得ば豈又快ならずや……云々。

(留岡幸助日記「第一巻」)

このように、北海道での事業は一年にも満たなかったが、牧野は社会の最暗黒を自ら体験することによって、「精神界の革命軍」「ブリットン・ウヨークの革命軍」の急先鋒を自ら任じ、真の宗教家たらんとした覚悟を持つに至った。

四、その人生観

牧野は明治二九年二月より土佐教会を牧し、其後、三年間のエール大学留学を了へ、明治三六年一月より、大正五年一月まで爾来一三年間、京都四条教会を牧する。この間、明治三七年に宮川経輝より按手礼を受け、彼の主著とも称せる『基督の聖訓』を上梓する。この著作は宮川経輝との共著で牧野はその前篇「基督の人訓」を担当しており、小著であるが、牧野のキリスト教観や人生観を知る上で看過しがたいものである。

牧野は、この著作の冒頭で「人多き人のかにも人ぞなき、人となれ人、人となせ人」という古人の歌を引き、「人格の修養」という「永久の問題」とともに、一方で「永久の解釈」があることを述べ、それが「基督の聖訓」にあるとする。「基督の教訓」とは「其

主旨とする処は己を棄てて天父に帰り同胞の為に奉事して此世を天父の聖意に協ふ神の国となすにあり。」と、こうして、人の人たる資格や使命、本領を論じていく。又、第五章の「理想の人」の段では、「人の人たる修徳の理想は則ちこの目に見えざる天父の聖靈に對して時々刻々自ら匡し自ら励む」ことにありと論じ、理想の人とは、「靈的生活をなす人なり。人間以上の靈界に遊びて人知れず懼れ喜び且つ励む人なり。」と説いている。又、第七章「躬行の人」で人格を論じて「人の人たる人格は、天父の聖意の上に築て、始めて完成せられたりと云ふべし。恰も千歳経の大磐石を基礎として、堅固なる建築物を建て得る如く、千古を貫きて、渝らず萎ぜざる天父の聖意に基くものに非れば、人は永生の途に入るに能はざるなり。」と述べているように、この著は真に、人としての生くべきあり方を、キリスト者の立場より明らかにしたものであるといえよう。

勿論、このように理念化された「人」としての有り様は、真のキリスト者としての存在、ひいては、牧野自身の問いに拘わって行く。即ち、牧野にとって永久の「修養」の場として人生があったのであり、人としての在り方を終生求め続けた結果が、多岐に亘る足跡となって残されたのではなかったか。彼はいう。「如何にして人の人たる資格を全ふし、其使命を果し、其本領を發揮して、この世に生れ甲斐ある者となるを得べきか。立身出世の問題に非ず、得失利害の条件に非ず、畢竟これらは人生の方法か手段に過ぎざれば、たとひその解釈は成功すればとて、人生の成功と云ふべきに非ず」（『基督の聖訓』）と。

晩年、牧野自ら「我等人間は未完成であるべきだ。未完成であればこそ生きて居るのではないか」即ち、「未完成の解決」（『針の穴から』）という人生哲学に辿りついているのも、真の解決を天上界に期した彼のキリスト教観に終止するものであった。

牧野は以上のように、若き時に新島襄の薫陶を受け、牧会、教育、社会事業に身を挺し、戦後まで長い人生を送った数少ない同志社人の一人であった。

（昭和五十一年大学院卒・高野山大学専任講師）